

1998年1月12日ヤスーンパリに激突

一友人から便り着く一

今日は翌13日朝7時40分、昨日書いたものをもう一度書き直すことにした。なにしろ突然のビッグバンである。12日ちょうど北京郊外でマグニチュード6.3の地震発生。ヤスーンなるものかつて太古、地球を回っていた二つの月の一つの月の名前である。その月が北極方面に激突、大陸ができた。そのヤスーンが私の宇宙に激突。私は木っ端微塵に飛び散り思考は激しく激動している。とにかく大きい。なにしろ月がぶつかったのだから。想像もつかない巨大なエネルギーが雷鳴を伴って振動している。女房もヤスーンて面白いね！と興奮一して質問してくるが私もただただ驚くばかりで大昔の友人のことはなにも知らない。それにしても彼自身の文章である「独創性の裏の危険」の文章のエネルギー。ほぼ、私もと言っても、所詮、彼とは別なものでしょうけど、彼は続けて「傑作という天才の裏の危険」という文章の中で、陳腐な罠に捕らわれて胸をときめかし、すぐに落胆。それはこのヤスーンは易々といまだヤスーンを知らない読者に貴方の形而上学のエネルギーを知らせます。また「サンフランシスコ地震と失われた月」ヤスーンについての伝説 麻生よう（漢字がでてこない）一郎という読売の記者が書いている。もう、これだけでも大成功なのです。あとは補強して行くだけで奇跡は実現します。すべての出発は「独創性の裏の危険」の文章に書いてあります。このことが奇跡なのです。奇跡は奇跡を引き起こします。同封しました松明堂ホール桜井孝身展は松本清張氏の2男か3男かは知りませんがご子息経営の書店の中にあるホールなのです。勿論私は清張先生は知りません。しかし名前が重なるところが奇跡だと思います。

私の感覚からしますと貴方はすでに大成功です。命題がひとりの人間に問いつづける。なんと素晴らしい絶対絶命のメビウスの輪。私は色々と考えてみます。例えば

1の場合、宇宙学者、地球学者をすべて含んだ「新発見者」の栄光者の名前。2の場合、哲学者としての思惟、命題の発見。まあ、私は専門家ではないので言葉が適当でないが、私ふうに考えると「テマー」の発見ということになります。3は理解しがたい平凡の存在ともでも名付けるべきもの例えば光合成、太陽エネルギーの理論は知らずとも知っている学者も無知なる大衆もおしなべて恩恵によくしています。まあ、あたりまえの言葉ですが、その当たり前のことが一番厄介で表現、説明、理解が難しい。脳にとっての無意識の問題はまずは理解の手立てがない。それにもかかわらず20年も30年も繰り返しつつけることは「なに」なのか。他人の生命まで含めて流れてゆく「普通の人生」。

その習慣化された日常を！無意識に流れているものを断ち切ろうとする動機とは。外国まで流れ出した絶対絶命の一はかない自尊心なのか？または単なる表現なのか、命題なのか。

人は自分の意思ではなく流れにそって生きてゆく。私はそれでいいと考えます。しかしながら貴方は「発見」した。科学的大発見なのかも知れない。皮肉でなく面白いのは学者が認めない。ということ。「認めない」エネルギーが大地震をおこす。勿論、大地震は貴方自身の存在にも関わらず、自然は地球は巖然と存在しているのでしょう。その交差する場所、私はここに及んで言葉を知らないのですけれど嘆覚、あるいは決定的に疑問を持つ事が出来る感覚、才能、瞬間、そのことに私は興味があるようです。そのことが科学的、哲学的を問わず大爆発、真理の発見へと道は通じてゆくのかも知れない。そんなこと分かりませんが「ヤースンの大爆発」は十分予感させます。松本清張先生が小説にしたことは宇宙衛星より意味は大きいものがあります。宇宙衛星も立派ではありますが「無意識の大河」を攪乱することは出来ません。なにしろ宇宙衛星は国家です。その国家も科学も立派ですが国家でない文学も凄いなあ！と思います。そのことは文学の方から眠れる科学者を目覚めさせることも意味します。ヤースンの「発見」は眠れる普通の人生を送っている人々に「大爆発、大発見」の夢、希望、自意識を呼び起こさせるからです。

私ののぼせてしまった言葉はあまり信用しないで下さい。私には誇大妄想的性格があると友人がいます。それにしても誇大妄想的に語る混乱と喜びがあります。それほどヤースンの「現在の展開」は私を驚喜させます。まさに芸術です。これは間違いない。自信をもたれていいのではないのでしょうか。

私の独特の誤解を呼ぶ方法、いつものことですが私は4、5流を狙ってやって来ました。勿論、一流を狙ってもなれる能力も才能もないからです。私流に考えますに一番は一人。劣等生はたやすい。選抜のない状態も考えられないこともない。当然、落伍者をも意味しますが、芸術とは所詮、人生の表現なのではないかと考えます。それはあたかも舗装されたいい道を高級車で疾走するカッコよさ。勿論、私にそんなこと回ってきたら決して離しはしません。しかし、回ってこないことぐらい分かっているから、やせ我慢して見栄をはり、私はガタガタ道を歩いて行くのだ。と心もないことを言ってしまった人生70年。大昔、貴方とお会いした時も現在もそうです。しかし希望はいつも踏みにじられるものでした。キリスト文化はユダヤの宗教を横取りしたうえ神に誓う聖書にさえ堂々と旧約聖書として収録して、新約聖書では徹底的に母なるユダヤ教を叩く、その新約のお蔭でローマ以来ナチスにいたるも虐殺が続く=ユダヤ人の世紀（フッパ・成功に隠された屈辱の歴史）Alan.M.Dershowitz 山下希世志訳ダイヤモンド社=と、ユダヤ人の怒りがあります。人ごとながら大変なことです。若し我が身に降りかかると思えばとんでもないことです。自分が痛いことは他人にするなと言うキリスト教徒自身がユダヤ教徒を殺す。殺されるに値するとユダヤ人自身がいつていると新約聖書に有るそうです。P102から「キリスト教の到来までは、ユダヤ人を特に迫害の対象にすることに、思想的な正当性は全くなかった。福音書、特にマタイ伝やヨハネ伝の中にこそ、キリスト教の反ユダヤ的教義の神学

的根拠が含まれている。マタイによる福音書によれば、ユダヤ人はキリスト殺害の集団的罪を自ら認め、「民衆全体が答えて曰く、『キリストの血の責任は、我々と我々の子孫の上にかかってもよい』」と言ったという。またヨハネによる福音書は、ユダヤ人は悪の化身であると断言し、あなた方は自分の父、すなわち悪魔から出てきた者であって、その父の欲望のままに行おうとしている。さらに、ユダヤ人は真の信仰を拒否することによって、神との契約を破ったのだとも言う。かくして、ユダヤ人が罰せられ、没落するのは、キリスト教徒が成功し、報酬を受けるのと同様に、聖書の予言通りなのである。こうした刑罰や没落は集団についても個人についても同じだ。ユダヤの国は、少なくとも国民が真の正義を受け入れるまでは、決して再建され得ない。悪魔の息子や娘たちは、国を失い、さげすまれ、貧しく、無力のまま地上をさまようことを運命づけられている。というのだ。四世紀にローマ帝国でキリスト教が国教となった時、教会は、ユダヤ人没落の予言を確実に実現する政治権力を獲得した。ユダヤ人は有力な地位から追い出され、その権利一政治、経済、社会かつ宗教上の権利一は奪われた。ユダヤ人迫害に貢献することが宗教上の義務ばかりではなく、市民の美德ともなった。」—こういった文章が長くつづきます。—このユダヤ人問題に類することは複雑な人間真理と理解しがたい真理の捩じれ、差別で私ごときが一言で論じることが出来ませんが、人間一番大切なことかも知れないと考えています。しかしながら、驚くことに現実の迫害はあってもいつも白人社会に属して黒人、黄色人種よりいつも白人に近く経済、文化をリードしています。唐突ですが女性蔑視もその一種一ではないかと私は考えています。私の場合、マザーコンプレックスもからんで複雑ですが、生物学的に子孫をのこす重要な母体、母親、女性の子育てと社会地位は当然、雄としての男より子孫生産上上位にランクされるべきものと思われませんが、人間社会の歴史はそうなっていません。このギャップは大変私には考えさせられる問題のように思えます。勿論、私にはかかる女性尊重の論陣を張る資格はとおの昔、喪失していますが、喪失した痛みなのでしょうか。また話は突然変わりますが、不思議と私の周辺には青年実業家が輩出しました。どの世界も大変なもので、2、3億の現金を持っているのはタダ一人、ほかは会社が潰れてしまいました。嫌な意味で貧乏ながら売れぬ絵を描く私が安定している始末なのですから本当に分からないものですね。今は4カ月の間、福岡県のアトリエ、8カ月間はパリ近くのアトリエと絵を描く分には困らない生活です。まあ、それだけで十分なのです。ところが女房の名義ながらどちらも自前のものです。なにか私には夢みたいな話しです。しかし相変わらず売れない絵ですから貧乏には変わりありません。

友人に手紙したあと私はなんでユダヤ問題まで書いてしまったのだろうと自分自身、説明のつかない変な気分になった。3日間の絶食、30日の座禅とふっと頭を過るのは

売れない絵を60年、70年と一生描きつづけるということは「なに」なのであろうか。それでも楽天的にみれば死なずによく生きてこれたものだと思うし、これは私だけでなく私

の知るかぎり色々の分野に未だに沢山いる。生きているかぎりにおいて困窮は酷いほど人生の不可思議さが出てくるように思える。大声で言うことははばかれるけれど。